

高速戦艦「赤城」5

巨艦「オレゴン」

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	夜の天弓 <small>てんきゆう</small>	9
第二章	井上成美 <small>いのうえしげよし</small> の献策	37
第三章	クエゼリンの惨劇	61
第四章	環礁燃ゆ	105
第五章	猛然たる「オレゴン」	155
第六章	忍び寄る脅威	201

・ 沖ノ島島

マリアナ諸島

サイパン島
テニアン島
ロタ島
グアム島

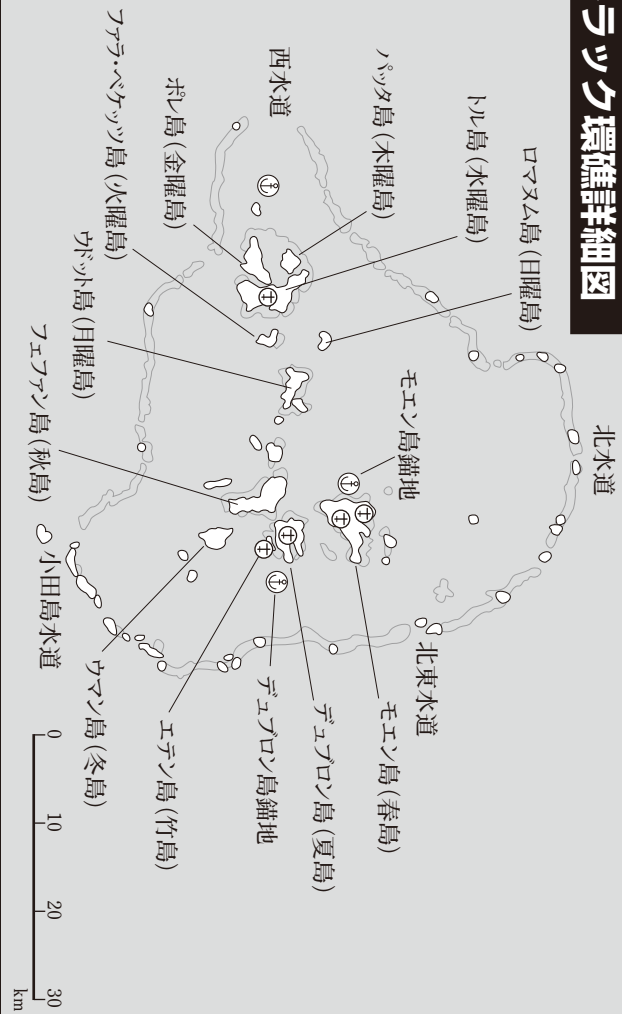
太平洋

トラック環礁

内南洋要域図



トラツク環礁詳細図





高速戦艦「赤城」 5

巨艦「オレゴン」

第一章

夜の天弓

てんきゆう

1

前方に、青白い光が点滅した。

攻撃隊指揮官機から送られた、オルジス信号灯の光だ。

「目標マデニ〇埋。高度三〇〇〇メートル」
と伝えている。

指揮官機が機首を上向け、上昇を開始した。

第一小隊の二番機も、指揮官機に続いた。

「後続機、どうか？」

「三番機、本機に続行中。二小隊以下の各隊も、上昇を開始しました」

二番機の機長と主偵察員を兼任する細田修飛行兵曹長の問いに、上部旋回機銃座を担当する尾藤平吉二等飛行兵曹が答えた。

攻撃隊——第二五航空戦隊に所属する第七〇二航空隊の一式陸上攻撃機四八機は、電探による探知を

かわすため、目標の一二〇埋手前で、高度を二〇〇メートルに落としていたのだ。

現在の時刻は二一時二〇分。

月齢一二の月明かりの中、攻撃隊は六分近くをかけ、高度三〇〇〇メートルまで上昇する。

指揮官機から「突撃隊形作れ」と信号が送られた。爆音が高まり、二番機が増速した。

細田機の役割は攻撃隊を誘導する吊光弾の投下だ。

吊光弾の投下位置が爆撃の成否を決めるため、最も重要な任務と言っている。

七〇二空は、今年——昭和一八年一月一九日、上位部隊である第二五航空戦隊隷下の各隊と共に、 Guam 島に移動した。

開戦時は「第六航空隊」と呼ばれていたが、昨年一月の制度改定で、部隊名が改称されている。

Guam 島では、昨年一月八日に米軍が降伏した後、設営隊が飛行場の整備を進めていた。

だが、トラック環礁から飛来するボーイングB17 フライング・フォートレスに作業を妨害されたため、使用可能とするまでに二ヶ月余りを要したのだ。

七〇二空はグアムへの移動後、サイパン島の第七五三航空隊、テナアン島の第七五二航空隊と共に、トラック環礁への長距離爆撃に参加している。

マリアナ諸島からトラックまでは遠すぎて、戦闘機の護衛を付けられないため、爆撃は敵戦闘機の迎撃がない夜間が主になっている。

この日の任務では、春島にある敵飛行場二箇所のうち、日本軍が「甲二」の呼称を冠した南部の飛行場を叩くことになっていた。

「爆撃手席に入る。操縦をよろしく頼む」

正副二人の操縦員に命じ、細田はコクピットから機首に移動した。

半球型の風防に覆われ、視界はコクピットより格段に広い。ともすれば、夜空の中ただ一人、放り

出されたような錯覚に陥る。

細田は、前下方に目を凝らした。

正面から右方にかけて、点々と連なる黒い影が見えた。

前方に見える、比較的大きな島影が、攻撃目標の春島だ。

「左に五度修正」

「左に五度修正。宜候」

細田の指示に、主操縦員の山岡満上等飛行兵曹が復唱を返した。

細田機は、僅かに機首を振った。

春島の北端をかすめ、東に回る針路だ。

「甲二」を攻撃するには、春島の西岸から南岸に回り込む方が近いが、春島の西側にある艦隊錨地には、米太平洋艦隊の戦闘艦艇が、常時二〇隻から三〇隻停泊している。

その真上を通過し、対空砲火を浴びる危険を避けたのだ。

直前まで正面に見えていた春島が、右前方から右正横へと移動する。

「針路一八〇度」

「針路一八〇度。宜候」

細田の新たな指示を受け、山岡が復唱を返す。

一式陸攻が一八〇度、すなわち真南に変針し、春島の東岸沖を南下する針路を取る。

「後続機、どうか？」

「本機に続行中」

「了解した」

山岡の返答を聞き、細田は機体の右方を凝視する。地上にも、海上にも、発射炎はない。

攻撃隊の姿は、敵の電探に捉えられているはずだが、トラックの米軍は、日本機の侵入に気づいていないかのように沈黙を保っている。

「針路二七〇度！」

頃合いよしと見て、細田は下令した。

「針路二七〇度。宜候！」

山岡が復唱し、一式陸攻が再び右に旋回した。春島の影が右に見える。

左方にも、春島に劣らぬ大きさを持つ島影がぼんやりと見えている。

開戦前は、トラックの中心となっていた夏島だ。

内南洋の警備を担当していた第四艦隊もこの島に司令部を置いていたが、今では米軍の大規模な航空基地が置かれている。

七〇二空の陸攻隊は、春島の南岸上空、三〇〇〇メートルの高度を突き進んでゆく。

右前方に、多数の発射炎が閃いた。前方に、次々と爆炎が湧き出した。

「始まった！」

細田は、小さく叫んだ。

春島の対空砲陣地が、砲撃を開始したのだ。

「針路、速度共このまま！」

「針路、速度共このまま。宜候！」

細田の指示に、山岡が応答を返す。

細田機は攻撃隊の先頭に立ち、炎と黒煙に向かつてゆく。

対空砲火が、俄然激しさを増す。

一度ならず、敵弾が近くで炸裂し、横殴りの爆風が機体を煽る。

かと思えば、弾片が命中したのか、不気味な打撃音が伝わる。

細田の目の前でも一弾が炸裂するが、機体にも爆撃手席にも異常はない。

細田は、ボイコー照準器を覗き込んだ。

激しい対空砲火に妨げられ、飛行場の視認は難しいが、過去の作戦で「甲二」を攻撃したことは何度もある。

そのときの記憶を頼りに、目標を探し求めた。

「あった！」

細田は、前下方に目指すものを見出した。

滑走路らしき直線路が三本、月明かりの下に見える。東西に二本が延び、一本はその二本と斜めに交

差している。

細田は吊光弾の投下間隔を設定すると共に、爆弾槽の扉を開いた。

「投下！」

叫び声と共に、投下レバーを引いた。

機首からは死角になるため、吊光弾の光は確認できない。

だが、爆弾槽に搭載して来た一〇発の吊光弾は、二秒間隔で投下されたはずだ。

「尾部銃座より報告。吊光弾の点灯確認」

「了解！」

細田は即答した。

自身の役割は、これで果たした。

敵弾の炸裂が、唐突に止む。

細田機は、春島の上空を通過したのだ。

「左旋回。針路二二五度！」

を、細田は下令した。

針路を南西に取って、島が少ない海面に抜けた後、

環礁上空を東から西に突つ切り、環礁の外に脱出するのだ。

「左旋回。針路二二五度。宜候！」

山岡が復唱し、陸攻が左に大きく傾く。

「弾着確認！」

再び、尾部銃座から報告が届いた。

飛行隊長篠崎健二少佐以下の全機が、吊光弾の光に照らされた敵飛行場に投弾したのだ。

「何発が有効弾になるかな」

細田は、口中で呟いた。

七〇二空の陸攻が搭載して来たのは、八〇番三式爆弾。対空・対地射撃用の三式弾を、航空機用の爆弾に改造したものだ。

地上五〇メートルから一〇〇メートルの高さで炸裂し、危害直径約四六〇メートルの範囲内に、焼夷榴散弾約七〇〇発、弾片約二三〇〇発を飛散させる。

トーチカのように堅固な建造物には効果が薄いが、

指揮所や倉庫のような防衛力の乏しい建造物や駐機中の航空機、対空砲陣地、生身の歩兵といった目標には大きな威力を発揮する。

今回は、敵飛行場に駐機しているB17や基地の付帯設備を主目標とするため、全機が三式爆弾を搭載して来たのだ。

夜間であるため、戦果確認は難しいが、一発でも多くが有効弾となるよう、細田は祈っていた。

「後続機——」

細田が山岡に聞こうとしたとき、出し抜けに左前方から黄白色の光芒が伸びた。

一条だけではない。

何条もの光の柱が、夜空を貫いている。

春島の南に位置する夏島からだ。離脱を図る陸攻に、探照灯の光が向けられている。

その光の中をよぎる影が見えた。

「右上方、敵機！」

細田が叫び、一拍遅れて陸攻が右に機体を傾ける。

横滑りをする格好で、細田機が光芒から外れる。敵機が姿をさらしたのは一瞬だったが、細田ははつきりと機種を見抜いた。

「篠崎二番より全機へ。敵機はロッキード！」
無線電話機を通じて、全機に警報を送った。

ロッキード P 38 ッライトニング。今年初めから戦場に姿を現した、双発双胴の重戦闘機だ。

同じ双発機であっても、運動性能、速度性能共に、一式戦闘攻撃機「天弓」よりも優れている。

航続性能も高く、B 17の護衛として、グアム上空に飛来することもある。

その機体が、七〇二空の帰路を襲ったのだ。

離脱時には春島の南西に抜けると睨んで、待ち伏せしていたのかもしれない。

「篠崎一番より全機へ。トラックの西に離脱せよ！」

「味方機一機、被弾！」
篠崎少佐の声がレシーバーに響き、次いで胴体上

面の機銃座を受け持つ尾藤平吉二飛曹が悲痛な声で報告した。

再び細田機が、光芒に捉えられた。

山岡が回避運動を行っているのだろう、機体が左に、右にと旋回する。

照準を外されたのか、後方から噴き延びる火箭が、翼端付近を通過する。

敵機が二機、細田機の頭上を通過した。

細田は、咄嗟に機首の七・七ミリ旋回機銃を発射したが、細い火箭が敵機を捉えることはない。七・七ミリ弾は、闇の中に消えている。

「山岡、降下だ！」

「了解。降下します！」

復唱が返されるや、機首が押し下げられ、機体が降下に移った。光芒の中、海面がせり上がり、間近に迫る。

降下する細田機の前方から、P 38二機が向かって来る。

P 38と手合わせした零戦の搭乗員は「旋回性能が悪く、格闘戦で背後に回るのは容易」と評していたが、それはあくまで零戦と比べてのことだ。機動力は、一式陸攻とは比較にならない。

P 38が、前上方から突つ込んで来た。

中央に位置するコクピットと二基の太いエンジン・ナセルが目の前に迫った。

敵機の機首に発射炎が閃く寸前、細田機の機首は更に押し下げられた。

直後、青白い火箭が真上を通過した。

P 38二機が、続けざまに頭上をよぎる。

金属的な、甲高い爆音だ。獲物に襲いかからんとする、猛禽の叫び声を思わせる。

春島の飛行場を焼かれた怒りが、咆哮となつてほとばしっているようだった。

「敵一機撃墜！」

尾藤が、弾んだ声で報告した。

「確かか？」

細田は、半ば反射的に聞き返した。

胴体上面の旋回機銃は、威力の大きな二〇ミリだが、命中率が悪い。

気休め程度だと思っていたが――。

「確実です！」

「了解！」

細田も、弾んだ声で返答した。

「敵機、右後方！」

新たな報告がレシーバーに響く。

残ったP 38が僚機の仇を討つべく、追いつがって来たのだ。

細田機は振り子のように左右に振られ、P 38の射

弾が翼端やコクピットの脇をかすめる。

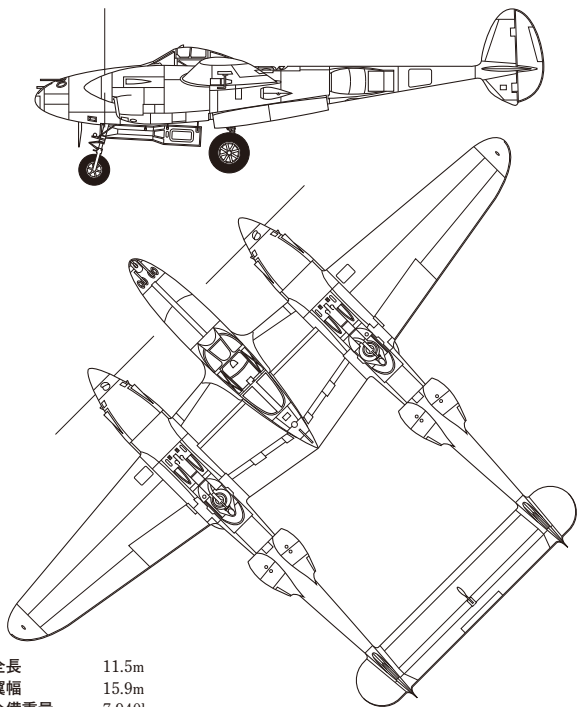
敵機は自らの射弾を追いかけるように、細田機の頭上を通過する。

一旦距離を置き、反転する。

撃墜に向けた執念を感じさせる動きだ。

爆撃機に墜とされたとあつては、戦闘機乗りの沾

アメリカ陸軍 P38E ライトニング



全長	11.5m
翼幅	15.9m
全備重量	7,940kg
発動機	アリソン V1710-27/29 1,150馬力×2基
最大速度	628km/時
兵装	20mm機銃×1丁(機首) 12.7mm機銃×4丁(機首)
乗員数	1名

ロッキード社が開発した重戦闘機。双発双胴という特徴あるフォルムを持つ。もともとは高高度防空用戦闘機として上昇力と高速度を重視した設計がなされており、格闘戦には不向きであった。日本軍の戦闘機相手にも苦戦する局面が多かったが、高空から急降下で敵機に接近し、一撃を加えて離脱する戦法に変換したことで、一転して大きな戦果を挙げることになった。航続距離も長いことから、B17爆撃機に随伴する護衛戦闘機としても運用されている。

券けんに関わるとでも思っているような動きだった。

光芒の中に、P 38の姿が浮かぶ。細田機の正面から仕掛けて来る。真まつ向勝負を挑いどむ態勢だ。

細田はP 38の真正面を目がけ、七・七ミリ旋回機銃を発射した。

ほとんど同時に、P 38も機首に発射炎を閃かせる。

七・七ミリ弾の細い火箭と一二・七ミリ弾の太い火箭が交錯こうさくする。

敵弾が左方に逸それ、P 38が細田機とすれ違った。

直後、探照灯の光芒が消え、機体の周囲に闇が戻った。

新たな光芒が投げかけられることはない。

細田機は、有効照射距離の範囲外に脱したのだ。

「敵機、追って来ません。本機を見失みひなった模様」
「よし……!!」

山岡の報告を受け、細田は安堵あんどの息を漏もらした。細田機は、P 38の猛攻を辛からくも切り抜けたのだ。

「篠崎一番より全機へ。西水道の西方五湮地点にて

集合、帰投する」

指揮官の声が、レシーバーに響いた。

篠崎機も、離脱に成功したのだ。

「篠崎二番より一番。西水道の西方五湮地点にて集合、了解」

細田は、復唱を返した。

後は、グアムまで帰るだけだ。

2

「敵の位置、アガ岬みさきよりの方位一四〇度、七〇湮。
高度サンマル二〇」

第五三三航空隊の第二中隊長長瀬充中尉のレシーバーに、飛行長島森司中佐の声が響いた。

五三三空は、グアム島を攻略し、マリアナ諸島全域を日本軍が制圧した直後に編成された、一式戦攻「天弓」の部隊だ。

天弓は敵重爆に対する邀撃ようげき戦闘の他、艦船攻撃、

敵飛行場への攻撃、陸軍部隊の支援と、多種多様な任務をこなしているが、五三三空は夜間の邀撃戦闘のために編成されている。

機数は二個中隊一八機と少ないが、夜間飛行を得意とする搭乗員が集まっている。元々の天弓搭乗員の他、水上機や飛行艇から転換した搭乗員も含まれる。

長瀬はそれまで、パラオ諸島バベルダオブ島の第一〇航空隊に所属していたが、中尉昇進と同時に五三三空に異動し、第二中隊長に任ぜられていた。

「永倉一番、了解」

「長瀬一番、了解」

飛行隊長永倉光安少佐に続いて、長瀬も指揮所に応答を返した。

第一中隊九機に、長瀬の第二中隊も続く。

巡航速度の時速三九〇キロを保ち、針路一四〇度すなわち南東方向に向かってゆく。

この日は四月一八日。現在の時刻は、二二時五〇

分だ。

月齢は一三。

満月よりもやや欠けた月は、西の空から柔らかい光を投げかけている。

夜間戦闘を行うには、悪くない天候だ。

もつとも五三三空の天弓には、月明かりなどなくとも敵機を捕捉できる機材が装備されていた。

「増山、現在位置は？」

「アガ岬よりの方位一四〇度、四〇浬」

長瀬の問いに、偵察員席の増山三郎上等飛行兵曹は即答した。

一〇空時代から、長瀬とペアを組んでいる部下だ。昨年一一月の制度改定によって下士官、兵の階級呼称が変更されたとき、上飛曹となっている。

「遭遇まで、五分とかからんな」

長瀬は、暗算して呟いた。

彼我の距離は三〇浬。

天弓の巡航速度なら九分足らずだが、五三三空と

敵編隊は、互いに向かい合う形で飛んでいる。

五分と経たぬうちに、敵機を捕捉するはずだ。

一分、二分と時間が経過する。

天弓一八機が装備する三菱「火星」三六基の轟々たる爆音が、夜の闇を騒がせる。

敵機はまだ視界に入つて来ないが、長瀬は会敵が近いことを感じていた。

二二時五三分、

「永倉一番より全機へ。電探、感有り。敵との距離一四（一四〇〇メートル）！」

永倉機の偵察員を務める服部英吉中尉の声が、レシーバーに入った。

五三三空の装備機は、天弓二二型。

天弓一一型のエンジンを、離昇出力一八〇〇馬力の三菱「火星」二一型に換装し、プロペラを三翅から四翅に変更した機体だ。

最大時速が五〇八キロから五五七キロに向上し、より邀撃戦闘に適した機体となった。

機首には英国より導入した機載用電探を装備し、闇の中でも目標を捉えられる。

「本機の電探にも感有り！ 正面上方です！」

続けて、増山の声が飛び込んだ。

長瀬は、前上方を見上げた。

多数の黒い影が、星明かりを遮りながら、五三三空の頭上を通過してゆく。

トラックより発進し、グアムに向かっているB17の編隊だ。

昨日、グアムより出撃した七〇二空の陸攻隊が春島の敵飛行場に夜間爆撃を敢行し、大きな戦果を上げたという。

敵はその報復として、グアムへの夜間爆撃を目標としているのかもしれない。

「永倉一番より全機へ。針路三二〇度！ 敵機を捕捉次第攻撃開始！」

永倉が、新たな命令を送って来た。

「針路三二〇度。長瀬一番、宜候！」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。